

教化センターだより

No. 418

発行日 2022年4月1日
発行 真宗大谷派大阪教区
教化センター
TEL 06-6251-0745
FAX 06-4708-3278

◆御堂文庫蔵書紹介◆

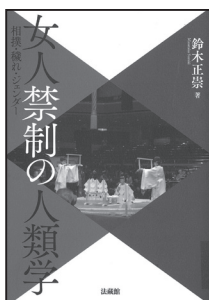


〈発行〉解放出版社

『いつまで続く「女人禁制」 排除と差別の日本社会をたどる』

〔編者〕源 淳子

「女人禁制」は女性差別としてあってはならないことです。多くの人には日常的に身近な問題ではないとなかなか関心をもってもらうことはできませんが、「女人禁制」という女性排除は、日本の男女平等を妨げている要因として、どうしても取り上げなければならない問題です。
(あとがきより引用)

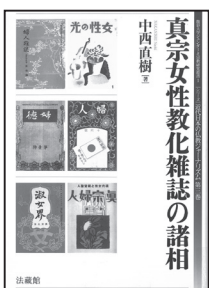


〈発行〉法蔵館

『女人禁制の人類学 相撲・穢れ・ジェンダー』

〔著者〕鈴木 正崇

本書は、女人禁制や女人結界に関する誤解を解くという実践的な試みを意図している。「暗黙の前提」を覆し、賛成か反対か、伝統か差別かという二分法を乗り越えて、開かれた対話と議論を促すための基礎資料と考え方を示そうとした。
(まえがきより引用)



〈発行〉法蔵館

『真宗女性教化雑誌の諸相』

〔著者〕中西 直樹

戦前期の女性教化とその関係雑誌について、真宗を事例にその実態に迫った論考と当時を代表する雑誌『婦人雑誌』の総目次を収録。関係資料の散逸が著しいなか、著者長年の資料蒐集しゅうしゅうによって垣間見えた一側面を提示する。
(帯より引用)

— 教化リーフレットの

「活用について」—

4枚の「教化リーフレット」は、各寺院・教会において「寺報」や個別に複写しての配布、同朋会や聞法会での教材として「活用」いただければ幸いです。

— 5月のリーフレット —

リーフレット①

「掲示板のごまは……教化センター

「感動のバトンリレー
あなたに届いた仏法味」

リーフレット②

「今月のことば」……成井暁信

「速入寂靜無為樂
必以信心為能入」

リーフレット③

「もしもし相談」……楠樹章彦

「友人との別れで
悲しみに苛まれ……」

リーフレット④

「仏典マンガ・仏さまのおしえ」

「ヤシャスの出家」

(敬称略)

感動の

バトニングリレー

あなたに届いた

仏法味

数年前、ご門徒たちとある小さな酒蔵を訪ねた。案内してくれたのは30歳くらいの青年で声が小さくなんとも頼りない感じで、横にいた女将さんに度々訂正されていた。

不器用な説明がやっと終わり、お待ちかねの試飲の時間、青年への不満など色々あったがやはり美味しい。試飲後、品定めに迷い、先ほどの青年におすすめて尋ねた。すると頼りないと思っていたその青年が、2番目に安いお酒を持って「僕はこれが本当に好きなんです。安いですけど、この酒造の良さが一番引き立っていると思ってます」と答えた。その時のキラキラとした表情は今でも忘れられない。本当に好きだという事がしみじみと伝わってきた。その後皆

がそのおすすめるお酒を
進んで手に取っていた。

この事でまさに物事は
味わった感動をもってこ
そ人に伝わっていくのだ
と実感した。近頃は仏
事やお墓など、次世代が
ちゃんと勤めてくれるの
かなど仏法相続が不安の
種になっているという話
をよく聞く。しかし私自
身が仏法をよく味わい感
動するところに自然と受
け継がれているものがあ
るのではないだろうか。

仏法の味とは具体的に
私を言い当てる言葉との
出会い、そして私を導いて
くれる人との出会いの中
に溢れている。ふと子や孫
から「あみださんってだ
あれ？」と尋ねられた時、
私たちはどんな表情で何
を語るのだろうか。

(教化センター)

速入寂静無為樂
必以信心為能入

速やかに寂静無為の樂に入ることは、必ず信心をもって能入とす、といえり。

「色はにほへど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ。有為の奥山けふ超えて、浅き夢見じ酔いもせず」という「いろは歌」があります。ここに有為ということばがでてきます。「無為」も涅槃と同じ意味ですが「有為」に對することばです。「有為」とは、因縁によって生じているもの一切の現象を意味する言葉です。縁によって生じ、縁によつて変化し、縁によつてなくなります。どれほど華やかに輝いて見える

ものも、時至れば散っていく。この世において永遠に存在するものはなにもないのです。「色はにほへど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ」という無常を生きているにもかかわらず、「いま」という時に酔いしれて、無常ということばを忘れます。それが浅き夢を見ている相であり、酔いにくっ

て安樂浄土という名が出されています。その安樂の樂をここで「みやこ」と読まれているのでしよう。苦惱の衆生に應えらるということが樂（みやこ）ということばで押さ

には信を以て能入と為すと述べられています。「当に知るべし」ということばは、迷いを重ね苦惱している 生死輪転を繰り返してきているのもそれはひとえに、自分の善根を頼みにして、本願力を疑ってきたことによるのだと強く押さえられたことばです。私たち人間は、曠劫の昔から現在にいたるまで、そしてさらに未來永劫にいたるまで罪惡生死の凡夫であつて、生死輪転の家を出離する縁がいささかもない。そういう私であることに間違いなしと深く信ずることが大事なことなのです。

（成井 晁信）

今月のことば出典『正信偈』

『真宗聖典』

207頁

『真宗大谷派 勤行集』（赤本）

もしもし相談



友人との別れで
悲しみに苛まれ…

問

先日、古くからの友人が亡くなりました。「人は必ず死ぬ時がある」「あなたの中で生き続けている」と、私を励まそうと声をかけてくれる方も居ましたが、友人の声、姿をもう二度と見ることができなと思うと、悲しみに苛まれてしまいます。どうしたらいいでしょうか。
(45歳・男性)

答

死別の苦しみは、失った人の存在が自分にとって大きければ大きいほど、その影響は生きていく間続くので、慰められたり励まされたりしても、

悲しみをなくすことはできません。ですから、悲しみを乗り越えようとするのではなく、そのことを抱えながら生きるという視点を持つことが大切なのではないでしょうか。

宗祖親鸞聖人は「人間」という言葉を「ひととまるるをいう」とおっしゃいました。人として生れたということは、関係性を生きる者として生まれたということなんです。私たちは人として生まれ、ただ生き、ただ死ぬということに耐えられず、生まれた意義と生きる意味を絶えず求め、確かめずにはいられません。家族や友人など、様々な拠り所を作り、そこに生きる意味を見出そうとします

が、それがなくなつた時この根源的な問題が露わになります。

一般的に「生」と「死」はそれぞれ別のものとして語られますが、仏教では「生死」と言い、生と死を平等に見つめます。生まれたら必ず死ぬいのちだからこそ、今この時を生きていると実感できるのだと思います。

諸行無常の世に生を受けた私たちは、日々新たな出会いをし続け、出会えば必ず別れがもたらされ、最期には出会った全てと別れなければなりません。死別後の寂しさ悲しさは、亡くなった人によって認識されていた自分が失われるからで、その喪失した部分は誰も埋

めることができませぬ。けれども、関係性を生きる者として生まれた以上、苦悩を抱えている人にとって、その苦しみをそのままに大事に聞いてもらえる新たな関係性が重要なのではないのでしょうか。それによって、喪失を経験したからこそその出会いや気づきや学びがあると思います。

そうした思いに向き合う仏法聴聞の場に足を運び、共に聞法する同朋同行と語り合うのも良いでしょう。自身のいのちで、人間の根源的な問題に気付けてくださった友人に感謝しつつ、自分なりの一歩を踏み出してみませんか。

(楠樹 章磨)

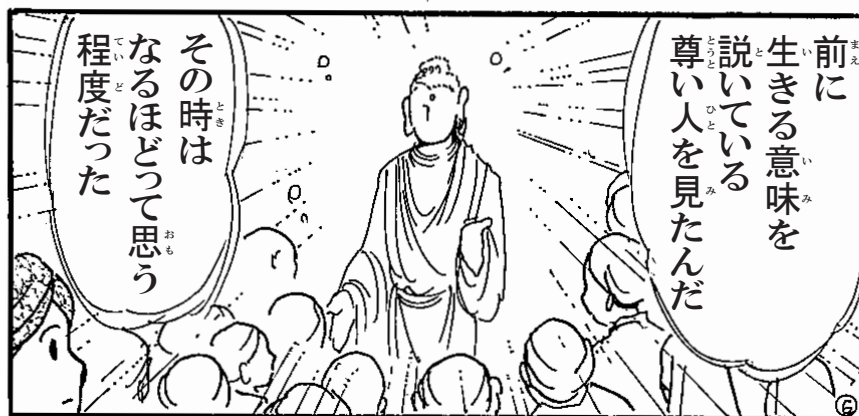
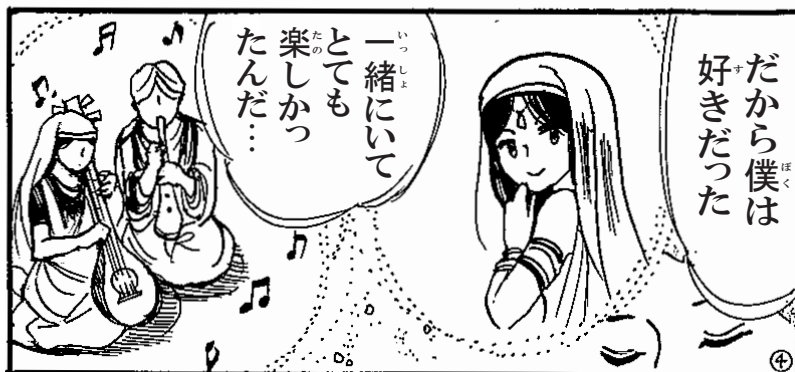
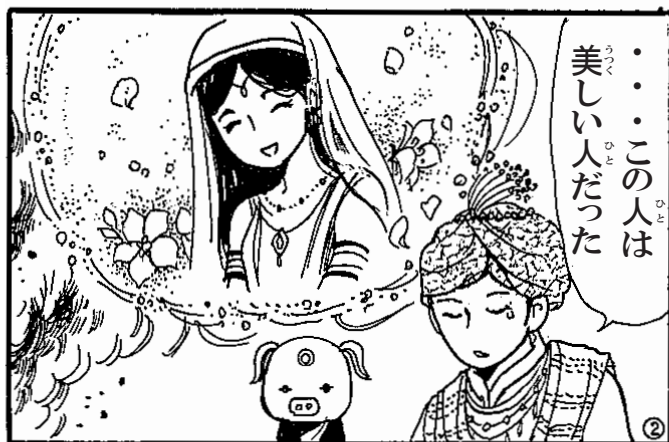


仏典マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ (202)

ヤシヤスの 出家



参考仏典：『仏教説話大系2』

仏典や仏教童話などを参考・題材にして教化センターが創作したお話です。